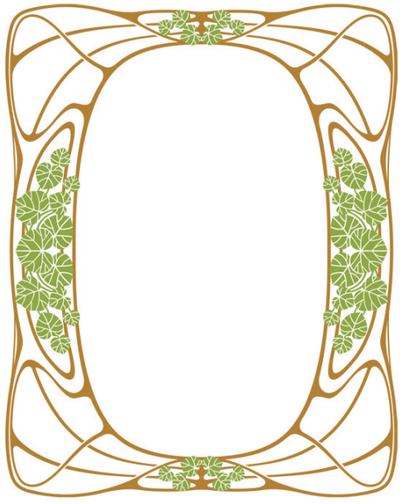
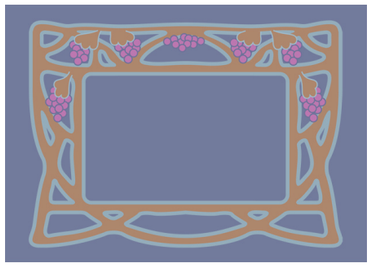
4 章　世界の伝統文様

アールヌーボー

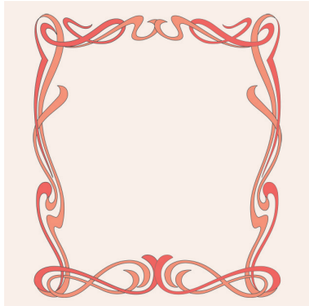


囲み（フレーム）
CD 4_078
アールヌーボー様式の代表格アルフォンス・ミュシャは、この様式を学ぶお手本ですが、これはドイツのフリードリッヒ・アドラーの複雑きわまる秀作スケッチを参考に発展させています。

囲み（フレーム）
CD 4_079
この様式をわがものにするのはたいへん難しいものです。単に曲線を組み合わせても、審美的でレベルの高いものはできません。



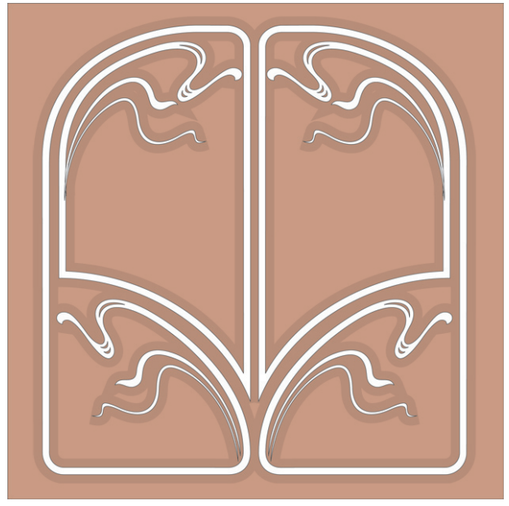
樹木の囲み
CD 4_080
あり得ない曲線とはいえ、樹木の生命力が感じられます。自然を模倣することを基本として、この様式に落ち着きを与えています。



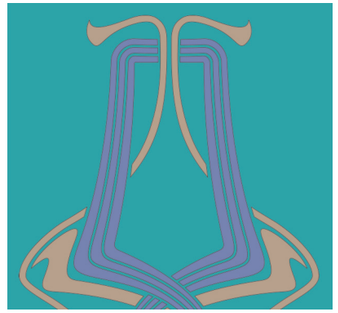
そのほかの囲み
CD 4_081
身近にある物、たとえばヒモ、煙、花など。自分が欲しい素材を、優れた作品に置き換えてみると面白いでしょう。そうしているうちに、新しい発見が得られます。

生活のほとんどの分野に及んだ新しい美術形式

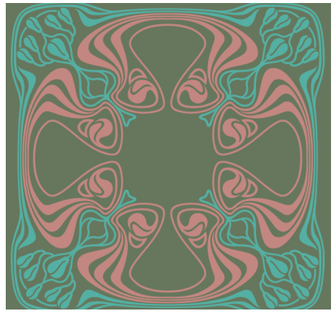
1890 年から 1920 年代、世界中を席巻したこの新しい美術様式は、東洋の自然観がモチーフになっています。自然界に直線はない、というのが前提で、生き生きとした流動曲線が主体です。とはいえ、単に曲線で描かれている、というものではなく、アールヌーボー（新しい芸術）という、限界が実にはっきりした様式です。この様式は生活のほとんどの分野に浸透しています。



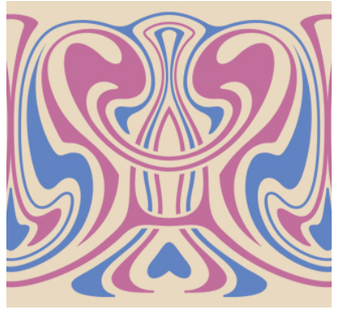
周り縁
CD 4_082
家具のガラス戸から抜き出して発展させたものです。家具のほかの要素がなくても、主張のある形を保っています。



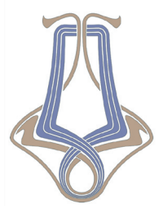
シンメトリー
CD 4_083
装飾品に見られる曲線です。発展させる難しさはありますが、線の整理をしてみると面白い発見があります。



染色
CD 4_084
線の増減や色彩変化を試してみると、新しい柄が無限にできそうです。



単位模様と連続模様
CD 4_085
現在では、ここまでのアクの強さは必要ありません。これも線の整理、色彩を吟味すれば、新鮮な柔らかさをもった面白い柄になるでしょう。

自然でさりげなく、美しい流動曲線を現代に生かす道

アールヌーボー様式という「唯美主義」は、芸術全般に様式化を求めるところがありました。しかし、いまやアールヌーボーの曲線に囲まれるパリやブリュッセルの街を歩いても違和感はありません。ただし、見過ごすことができずに、「美しい曲線に囲まれている」という実感が残るところに、実はこの曲線のもつ凄みがあるのです。